

---

# 遊戯王 ~世界又にかける転生者~

syo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王～世界又にかける転生者～

### 【Zコード】

Z8024L

### 【作者名】

syo

### 【あらすじ】

主人公の神野妖斗は、友達とデュエルした帰り道に『ナチュル・ロック』にひかれて死んでしまった。

そこから第二の人生が始まわり世界を転々としていく漂流物語！！

さらには他ではありえない精霊に憑かれてしまい、主人公疲労度増  
加中！

この小説は後半から書き方を変えたので、前半は駄文も駄文になっています。後半も駄文ですが、前半よりはましなはずなので、どうか最後までお付き合いください！

## プロローグ（前書き）

一度退会してしまったので、復旧させました。

## プロローグ

俺は神野 妖斗。かみの ゆうと自分で言うのもなんだけど、頭はかなりいいと思  
う。

運動神経は中の中くらい。ちょっと遊戯王好きな僕は、普通の中  
3だ。

しかしながらこんな説明をしているかつて?  
いま俺の周りは現実的に考えてありえない状況になつていて。

「どうした…」

俺はとうとう「あの田」のことを振り返った。

あの日俺は普通に部活（野球）をやり、友達と家に帰っていた。

そのあと友達の上刃

かみじり弘樹のいえで

いつものように友達4人でデュエルをした。

そこまではよかつたんだ。家に帰ろうと少し外れた裏道を通りてい  
ると、

急に前から超巨大な《ナチュル・ロック》が転がってきた！

「はっ！？」この展開は・・・・・来オイ！異世界トリップ！－！」

俺は一瞬で開き直り、厨二の夢（異世界トリップ）になることを祈  
りながら、

抵抗せずにむしろやいつに向かって突っ込んでいった。

## プロローグ（後書き）

プロローグです。

デュエルは次々話くらいからかな。

## 第一話 転生？憑依？（前書き）

全部丁寧に、前の作品が結構前になっていたので……

## 第一話 転生？憑依？

「…………」  
「何もないただ白い空間。これは本当に来たんじゃねえのか？」

「もももも、申し訳ござりませんー！」の度は私のペットが「迷惑をおかけして……」

キタ  
…………田の前には見た目12、3歳  
の少女。

あきらかに「神」だな。

「そのとーり……いや、ちょっと違つかな。私は神見習いのセレナ。

てかホントすいません私のペットが……」

心読んでるし。てか本題は、

「転生をしてくれるんだろうな？特権もあるよな？転生先決めていいよな？当然遊戯王な」

一気に聞きたいことにつた。

「す」「こですね、ほとんど私から言つこと無くなりましたよ。あ、一つだけ。転生か憑依かはすいませんがランダムです」

む・・・・まあそんぐらいは許容範囲だな。

「では特権ですが、やつぱりチートデローですか？」  
「そんなんいらん。とりあえずいま使つてる8つの「トックキがあればいいよ。あとは主要メンバーに入れといてくれ。あ、初日に限つて

転生先は3回までキャンセルできるってことだ

「謙虚ですね、まあいいでしょう。憑依した場合は憑依先のテック  
も使えるので、あしからず」

「ではどこが世界へ？」

「やつぱセオリーどうりここには遊戯王gxだよな。  
「じゃあ遊戯王gx遊戯王ですね？わかりました。では・・・お  
い？」

「GO！」

視界が光で埋め尽くされた。

## 第一話 チートの裏側（前書き）

「どの回でコント？」があります

## 第一話 チートの裏側

視界が戻った。そして冒頭。

「これは・・・電車の上？お、王様が対戦相手か。

てことは憑依だな俺のライフは・・・3700だ

王様のフィールドには・・・なんか蛾みたいなやつと《魔道戦士ブ

レイカー》ん？

いま俺のモンスター破壊されて・・・んん？

「まだまだ！《魔道戦士ブレイカー》でダイレクトアタック！」う

おっ、

妖斗 L P2200

「でもその蛾っぽいの効果でおまえは負けだ！」

なんか勝手に言葉出てきた。しかもちょっとアレンジで。とかこの展開はあれしかないとしょ。

くらうだけくらうといて転生先変えよう。

「何勘違いしてるんだ、まだ俺のバトルフェイズは終了していない」

E

くるよ~

「速攻魔法！《狂戦士の魂》（バーサーカーソウル）！！！手札をすべて捨て、効果発動！モンスター以外のカードがでるまでデッキからカードをドローし、その枚数分追加攻撃できる！」

きましたよ遊戯王で1、2を争う有名シーン！

あ、いうまでもなく、ひょうい先は羽蛾ね？

「ドロー！引いたカードは《クイーンズ・ナイト》、追加攻撃！」

妖斗 L P700

「一枚目！モンスターカード！追加攻撃！」

妖斗 L P00

ぐつ！くるぞチート！

「三枚目！モンスターカード！ドロー！モンスターカード！ドロー

！モンスター カード！ドロー！モンスター カード！ドロー！モンス

ター カード！ドロー！モンスター カード！ドロー！……………

つ、も、モンスター カード！ドロー！「おい。」なんだ？』

「いまの…………つ、はなんだ？」

「な、ななんでもないわあ！ドロー！モンスター カード！「おい

ゴルア。」なんだよ？」

「やけにモンスター ばつか引くと思つてたら そいつ 仕組かあ！反

吐が出るぜー！この虫野郎！！」

「はつ・・・・く、くそつ！AIBO！AIBO！AIBO！」

充分弄つたし、満足満足。

おーい、セレナー。

『なんでしょうか？』

転生先変更。

『了解しました。そんじや、come back！……』

再び視界が光で埋め尽くされた。

## 第一話 チートの裏側（後書き）

思い切って王様チート使ってました設定。  
すいませんが主人公のマイティック使うのはもうちょっと後になります。

## 第二話 有名シーンと条件追加（前書き）

この回2度目の転生。

## 第三話 有名シーンと条件追加

「では、2回目の転生ですがどちらへ？」

「あのわあ、人の話は最後まで聞こいつな？」

「すいません、見面いで早とちつなもんぢ···」

「10万歩譲つて許してやる。それじゃ、次こそ遊戯王GXの世界へ。

時間は、ダーツわかりました、遊戯王GXですね」クネスつておい

!—

もういやこんな神様···

「ではレッツリGOー！」

うわ、古っぬー。

転生完了……だな？さーでどにきたかわっかんねーな、あのアホ神のせいだ。

「俺は……負けたくないイイイ！！！」

うわっ、びっくりした。相手ヘルカイザーになりたての亮さんか。ことは俺は……誰だったつけ？あの《酸のラスト・マシン・ウイルス》使ってるやつって。

ま、いーや名前忘れたし。

「《オーバーロード・フェュージョン》発動！墓地の《サイバー・ドラゴン》を含む6体のモンスターを除外し、こい！《キメラテック・オーバー・ドラゴン》！」

あ！確かにこのデュエルってびりびり来るやつだつたよな？  
転生先変えないと死んじまう！でも、「五連打……！」<sup>ガオレンダア</sup>聞きたい！

「なにをぶつぶつしているんだ！いけ！キメラテック！『エヴォリューション・レザルト・バースト』！！

五オ連打ア（ガオレンダア）！！！」

きけた！我、満足せり！あ、光線思つてたよりはええ！セレナ、セレナー！

『まったく世話の焼ける人ですねー』  
イラッ。

「す、ごめんす、ごめんす、ごめんでしたあー。もうやめてしまえー！」「田、田があー！」

え！！！目、目があ！

べつに変なことないよ」と半田玉をせり出しながらだけだ  
よ。

「もう怒った。もうひとつ条件追加だ。俺をオリキャラとして転生させなさい。」

1

「それほきついです！そんなことしたらわたしの信用問題です！」

「はい、あと玉ねぎ1つ 終わったら正座20時間

「わかりました、わかつたからやめてえええええ……」

「んじゃ、今すぐ元祖遊戯王のバトルシティあたりに転生せろ。」  
「は、ハイ・・・・ GO ・・・・・・・・」

視界がなんか最初のときよりどんよりとした光に包まれていつた。

## 第三話 有名シーンと条件追加（後書き）

次回やつと主人公のマイティックその1がでます。  
感想があつたらお待ちしております。

## 第四話 初めての相手 マイナスキー（前書き）

やつときた主人公のマイナスキーその一。  
何かは本編をどうぞ。

## 第四話 初めての相手 マイデッキ1

「散れ！」

えええええ～いきなりスタートかよ。

まあ、せっかく原作キャラと戦える機会だし、楽しむとしますか。あ、王様とか社長は飛行船で戦いたいからまだ自重。まあある程度の原作ブレイクしたいんだけどね。

「・・・・・と、デッキは・・・」

おし。8つある。俺は友達曰く『究極のあきっぽさ』を持っているらしく、まあ自分でも否定できないが・・・とにかく3回以上連續でおなじデッキを使いたくない。

だからデッキ数がほかのやつと比べてやたら多い。シンクロもあるが、まだ自重。顔芸と戦うときとか命がかかってるときにつかおうかな。

「おい！僕とデュエルしろ！」

おっ、申し込み。おれの初相手は…？

・・・・

ええええ～エスパー野郎？やってもいいけど勝つたら凡骨どうすんだ？ま、

「いいぜ。パズルカードは1枚だよな？」

「ああ。そしておれは『人造人間サイコ・ショックカー』をアンティとする」

そんなカード、おれは36枚持っているよ。

さすがにウソだが、6、7枚は持ってるぞ？

んじゃおれの初陣はこの「トッキ」で。

「俺は『青眼の究極竜』だ」

「…………」

「わ・・・わ・・・

あーそーいや幻のレアカードだったつけ。

「んじゃ、始めようぜ」

「あ、ああ。アンティには驚いたが、それとテュエルは別だ。僕には超能力があるのでな」

「君の弟たちはそこにはいるんだけど？」

「なにつ？なぜだ？屋上にいるといったはず……つていねえ！」

「ひつかかつたひつかかつた。で、その無線をきれ」

「貴様、なぜそれを！？」

原作知識。これで手札見られる心配なし。

「とにかくやるがー！」

「ちつ・・・」

「「デュエル！！！」

「先攻はもう一ドロー！僕は《サイバー・レイダ》召喚！さらに《二重召喚》発動！《サイバー・レイダ》を生け贋に、こい！《人造人間サイコ・ショック》！！」

おー早い。てか《二重召喚》ってあつたつけ？まあいいか。てか手札ヤベえ。そろい過ぎ。

「僕はターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー！」

手札から《おろかな埋葬》発動！デッキから《青眼の白龍》を墓地へ送る。

さらに《手札断殺》発動。手札の《青眼の白龍》2枚を墓地に送り2枚ドロー！

「僕も2枚捨て2ドロー！」

「ワンキル行くぞ！《龍の鏡》！墓地の《青眼の白龍》3体を除外し、現れる！《青眼の究極竜》！！

さらに《異次元からの埋葬》！今除外した3体を墓地に戻し、もう一枚の《龍の鏡》！

こい、2体目の！《青眼の究極竜》！！

「な・・・・・あ、ああ・・・・・」

エスパー戦意喪失。

「バトル！！《青眼の究極竜》で《人造人間サイコ・ショック》を攻撃！『アルティメット・バースト』！！！」

「ううう……」

エスパー LP 1900

「終わりだ！2体目の『青眼の究極竜』でダイレクトアタック！『アルティメット・バースト』！！」

「ぐああああつ！」

エスパー LP 0

「粉碎！玉碎！！大喝采！！！フハハハハハ！ワーハハハハハハハハハ！」

「くそつ…受け取れ！」

「パズルカードはもううが、アンティカードはいらん」

「え？」

「俺持ってるから。そいつは大切なカードなんだろ？」

「あ、ああ…」

「だつたらもつとけ。そいつともつと強くなれよ、な？」

「ありがとう、じゃあパズルカードだ」

「おし後4枚だ！」

そして俺は次の相手を探しに街中へと出て行つた。

## 第四話 初めての相手 マイティックキー（後書き）

まずあらわれた一つ目の「トッキ」。  
見ればわかると思いますが、【青眼の白龍】です。  
少しネタバレすると、8つの内3つはブリゴンです。  
タイプは違いますが・・・

感想、ありましたらお待ちしております！

## 第五話 初めての主要キャラ マイナッキー（前書き）

今回初めて決勝進出者とトヨエル。誰かは本編びつだー！

## 第五話 初めての主要キャラ マイティック2

えーっと、おれの初デュエルから約2時間。

その間俺は大きい道しか通つてないし、実際デュエルディスク付けてる人もいるのに何故か話しかけられん。こっちから声をかけても

「すいません、今から他にデュエル相手いるんで・・・」  
とか言いながらせつまい喫茶店に入るやつもいれば、

「あ、そろそろ3時のおやつだ！」

といつて猛ダッシュして逃げる奴もいる。その時11：30。

やっぱ最初に究極竜2連打ア！はまずかつたか？

と若干後悔しつつ相手を探し歩いていたら

「アンタ、さつきノーダメワンキル決めた人ね？」

という声がしたため、

「そうだが？」

と言しながら振り向くと

・・・・・

「おわあっー？」

そこにいたのは金髪で露出の激しい服を身にまとった明らかにアネキ肌な女性、御存知ハピイ使いの孔雀舞が立っていた。まさか・

・

「アンタ、アタシとデュエルしないー！」

オイオイマジかよ、いきなり決勝進出者とやんの？まだはええーつて。

「いや、いまト「パズルカードはお互い2枚、アタシのアンティイは『ハーピィ・レディ三姉妹』よ！」なつ・・・」

話聞こうぜ、どこの神様じゃあるまいし。とはいって、なんかギヤラリーできてるし、ここはいつちょ派手に原作破壊しますか！え？エスパー？・・・さあ、今から「派手に」原作破壊しますか！

「いいぜ。俺のアンティイは・・・」

主要キャラに手は抜けん。

「『大天使クリスティア』だ」

「見たことないカードね、まあいいわ、始めましょ」「ああ、本氣でいくぞ！」

「「デュエル！！」」

「アタシの先攻、ドロー！まずは様子見ね、『ハピィ・レディ1』を召喚！

そして『デザートストーム』発動！『ハピィ・レディ1』の効果も合わさって、攻撃力は2100！

さらに『万華鏡・華麗なる分身』発動！きなさい、『ハーピィ・レディ三姉妹』！

その攻撃力は『ハピィ・レディ1』と『デザートストーム』の効果で2750！カードを2枚セットし、ターンエンドよ！」

・・・えーと、まずどこが様子見？1ターン目から2100と27

50ねえ・・・

んで『ハーピィ・レディ』つてこの辺り1・2・3シリーズだった  
つけ?やっぱイレギュラー混ざると色々違つてくるのかなあ?

ま、2750なんて俺の『テッキじや、

「俺のターン、ドロー!」

よくもなぐ、悪くもなぐ、だな。

「俺は『死皇帝の陵墓』と『神の居城・ヴァルハラ』発動。  
まずヴァルハラの効果を発動し、『アテナ』を特殊召喚!さらに『  
死皇帝の陵墓』の効果で2000ライフポイントを払い、『大天使  
クリスティア』を召喚。

『アテナ』の効果発動、相手に600ダメージ!」

「くつ・・・

妖斗LP 2000  
舞LP 3400

「バトルフェイズ!『大天使クリスティア』で『ハーピィ・レディ  
1』を攻撃!『クリスティア・フラッシュ』!  
おおう厨二。

舞LP 2200

「さらに『アテナ』で攻撃力1950になつた『ハーピィ・レディ  
三姉妹』に攻撃!『ソーラー・ライト』!  
ネーミングセンスが・・・もうこれから知つてゐやつ以外に名前付  
けんのやめよ・・・

「うつ・・・」

舞 LP 2050

「ターンエンド」

「私のターン！『強欲な壺』！カードを2枚ドロー···さらに2枚目の『デザートストーム』！そして『ハーピィ・クイーン』召喚！召喚時にリバースカードオープン！『連鎖破壊』！この効果でアタシはデッキから『ハーピィ・レディ1』を2枚墓地へ送り、これで終わりよ！リバースカード『ヒステリック・パーティ』···は、発動しない···？どういう事！？」

「『大天使クリスティア』はあらゆる特殊召喚を封じる永続効果を持つている！」

「そ···そんな···ターンエンド···  
ブラフも伏せずに舞はエンド宣言した。」

「いいコンボだつたぜ。クリスティアがいなけりや負けてたかもな。  
俺のターン、ドロー！  
バトル！『アテナ』でハーピィ・クイーンに攻撃！」  
攻撃名自肃。

舞 LP 1850

「終わりだ！楽しかつたぜ。『大天使クリスティア』でダイレクトアタック！」

「うわああああつ！」

舞 LP 0

「受け取りな、パズルカードとアンティイだ」

「例によつてパズルはもうがアンティはいらん」

「ありがとね・・・・・アタシの分までがんばりなさいよー!」

「ああ・・・まかせる。かならず決勝に出てやるー!」

さあ、あと2枚だ。がんばるバー!

ん? そういうやなんか・・・・・ああーー舞に勝つたってことは俺決  
勝でたら

初戦マリク! ? ヤベえつて、それはシャレになんねえよ・・・・あ  
いつもなかなかのチートドローとバランスブレイカー持つてたよな  
確か・・・・先攻1ターン目攻撃とか・・・

それ以上に闇のゲーム怖いよーーしまったあああああああああ  
!!!!!!

## 第五話 初めての主要キャラ マイティック2（後書き）

はい、そうです。某カードサイトでも有名な【終世】で「じぞこ」ます。  
実はリアルに持ってるんですよ、終世。  
でも費用がお年玉全部はたいてもまだ足りないといつ恐ろしいトック  
キなので、

作って後悔しました。めっちゃ強いですけど。  
てかライフ4000制じゃきつこんですけどね、陵墓使うには。

さあ、自分でバッドエンドへのレールひきました主人公。  
次の相手はみんな知ってるあの人人です。

感想、ありましたらお待ちしております！

## 第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラーーー？（前編）

この回はトニエルはおまけ。  
それより次につなげる話です。

## 第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラー！？

「さあ・・・次の相手はだーれかな？」

「そう言つて辺りを見回しても誰も相手にしてくれない。

「しようがない・・・また原作キャラでも相手にするか・・・」  
でも強烈な補正がかかつてるのは確実だしな・・・舞倒したじびつ  
せなら決勝出たいもんなあ・・・

そんなことを考へていると、後ろから

「ヒヨヒヨヒヨ・・・お前、僕とデュエルしろー。」

・・・・・・・・  
えええ～まじで城之内どつするんだろ？でもこいつはぶちのめし  
たい氣も・・・

「よし、やるうぜ。パズルカードはいま何枚持つてるんだ？」

「4枚だ」

「よし、全賭け。」

「なんで！？お前も4枚じゃないか、8枚になつて2枚余るぞ？」

「そつちの方がスリル出るだろ？アンティみせな」

「まあ僕が君みたいなやつに負けるわけないけどね～ヒヨヒヨヒヨ  
ヒヨー！アンティは《インセクト女王》だ、きみは？」

・・・正直力チンときた。こいつはもう最大火力で焼き殺す。40  
00制のこの世界では使わないようにしようと思つたけどこいつに  
限つてその封印を解く！

「俺は《火炎地獄》だ・・・ヒツヒツ始めるぞ！」

「ひょ？僕に勝てるとでも？」

「「デュエル！！」」

「俺の先行ドロー！《デス・メテオ》発動！さらに《火炎地獄》 2

枚！」

「ピヨ～！！」

妖斗 LP 3000

羽蛾 LP 1000

「さらにモンスターをセット！《太陽の晝》！セットしたモンスターを表に！そのモンスターは《メタモルポシト》！お互いに手札をすべて捨てて5枚ドロー！カードを3枚セットしターンエンド。」

「僕のターン！ドロー！カードを4枚伏せてターンエンド。」「つ！？早！タイミング逃した・・・

「俺のターン！リバースオープン！《仕込みマシンガン》。1200ダメー・・・「させるか！トラップ発動《王宮のお触れ》！これできみのトラップは封じたピヨ～！」ちつ！」

「なら俺は《ファイヤー・トルーパー》召喚！効果発動。お前に1000ダメージ！焼きつくせええええええええ！」

「うわあああああ！な～んテネ。リバースカードオープン！《非常食》！僕の《王宮のお触れ》以外の2枚を墓地へ送り、2000ライフを回復！」

また防がれた・・・てかデッキおかしくね？昆虫はどうへいった昆虫は。

羽蛾 LP 2000

「ち・・・俺は《J隱居の猛毒薬》2枚で1600ダメージを『え、ターンエンド』

羽蛾 L P 400

「僕のターン！ドロー。僕は《ゴキボーリ》を召喚、ダイレクトアタック！」

妖斗录 P 1500

「ミツヤだらけ」

「俺のターン！」  
「！消し飛へえ！』『ファイヤー・ソウル』  
！デッキの『ヴォルカニック・デビル』を除外して1500ダメージ！」

「うわあああああああ！」

羽蛾 LP 0

「ほらよパズルカード。アンティは例によつて『いやもらう』へ?」

一  
お前は個人的に腹立つから。  
例外

「そ・・・・そんな・・・・あんまりだあつー!」

「だまれ。これはもうつていいく。まあ使わないんだけどな」

「使わないのかよ。」

ヨーレ・パズルカード8枚！2枚余ったがまあいいだろう。さあ、ストージアムにいこう……つと、その前に王様＆社長とか王様ＶＳ洗脳城之内の戦いとか見ないとな。

適当に街でも回って時間つぶすか……と思つていたが、ふいに後ろから

「神野……妖斗……」つ！？誰だ？俺の名前知ってるだと？つかこの声……

ゆっくり振り向くとそこには、

「弘樹！か！？」

俺の現実世界での親友……上刃 弘樹かみとひろきが、明らかにおかしい様子

で立っていた。

「俺と……デュエルだ……闇のゲームでな！」

## 第六話 決勝進出！ 新たなイレギュラーー？（後書き）

主人公が今回つかった【フルバーン】はマイティックじゃないです。この世界にきて、4000だと楽に勝てるんで封印しました。でも羽蛾がウザかつたんで・・・

次話オリジナル展開になります。

ご感想、ありましたらお待ちしております

## 第7話 友情を取り戻せ！ マイテックキ3（前書き）

・・・すいませんこんな滞つて。  
ともかく今回オリキヤ「ワセの」テック判明！  
てか両方相当ガチです。

## 第7話 友情を取り戻せ！ マイティック3

「おいおい……なんでおまえが……」

意味がわからない。俺は死んだからこの世界に転生したんだろう？ だったらなんでこいつが？

「そんなことはどうだつていい。俺はマリク様の命により危険分子の神野 妖斗を消しに来た。それだけだ」

「……よく見たらこいつ額に眼が浮き出てやがる……これは危ないな……」

「いいだろ？ だつたらとつととデュエルやろ？ や」

聞きたいことはいっぱいある。こいつがこの世界にいる理由。危険分子とはなんのことか。だがまでは、おかしくなった俺の親友を助ける！

「お前の死に場所にふさわしい場所を用意した。ついてこい」  
そう言って弘樹は俺に背を向け『死に場所』に向かって歩いて行った。

「クククク・・・」

思いのほか役に立つようだあの少年は。我らグールズにとって計画に支障をきたしそうな者・・・危険分子は3人。まず、人形を倒しオシリスの所有者となつた武藤遊戯。

我が姉、イシズからオベリスクを受け取つたこのバトルシティの主

催者、海馬瀬人。

そして、グールズの情報網でもまったく素性がつかめず、見たことのないカードを使って実力者を圧倒している神野 妖斗。

遊戯に対してはいい駒を見つけたから送つておいた。

海馬と神野は神野 妖斗の親友を名乗り、見たこともないカードを使うあの少年に倒させるとしよう。

あの少年は水族館で梶木を倒して出てきたときに捕まえ、洗脳した。「あの少年の本当の力は知らんが、我らにとつていい方に働くだろう・・ククククク」

グールズのボス、マリクは人知れぬ邪悪な笑みを浮かべていた。

「ここは！」

「驚いたか？あいつらをよく見てみな！」

「なつ・・・・！」

そこにいたのはぼろぼろの遊戯。

海から這い上がってきた城之内。

一人ともずぶぬれである。

そう、この場所は童実野埠頭。あの遊戯と洗脳城之内がデュエルをした後だった。

あの一行は城之内と妹、静香の再会に喜んでいる。  
遊戯がこっちに気づいたようだ。

「・・・・まさか君も親友を洗脳されたのか！？」

「ああ・・・おそらく今からデュエルするだろつな

「マリクの野郎は俺がゆるさねえ！俺がやる！」

城之内がいきり立つがそれを妖斗が止めて

「悪い、あいつは俺が正気に戻す。君たちは観ていてくれ」  
決意を秘めた妖斗の表情に一人はうなずき、一步下がった。

妖斗はデッキを選ぶときには迷っていた。

（あいつは本気で戦うときはあのデッキを使う……それに対抗するには俺もあれを解禁するしかない……でもこの世界で使つていのいか？……いや、使うしかない！俺は全力であいつと戦い、あいつを正気に戻す！）

「よし、待たせたな。デュエルを始めよう

「あせんなよ、まずは下準備だ。」

「・・・・！」

二人の周りが闇に包まれ、頭上には暗雲が立ち込める。

気づいているのは2人と遊戯だけだ。

「このデュエルに鎖だの手錠だの必要ない……ライフが0になつた瞬間……死ぬ！！

そしてプレイヤーはライフダメージに応じた痛みを受けてもらおう！」

「闇のゲームか、城之内の時よりもたちが悪いな……俺が勝つてもあいつは死ぬ……どう戦えば？」

「妖斗、お前は全力で戦え！俺が千年パズルの力でなんとかして見せる！」

遊戯が声援してくれる。信じていいんだな？

「ありがとう。俺は俺の全力であいつを倒す！！！」

「減らず口をたたくな……本気でいくぞ！」

「デュエル！！！」

「先攻は俺だ……ドロー！俺は《インフェル＝ティ・ビートル》を攻撃表示で召喚！さらに《インフェル＝ティガン》を発動！効果で手札の《インフェル＝ティ・デーモン》を墓地へ送る！カードを

2枚伏せターンエンド！

やつぱりか・・・弘樹の本氣は【インフェル=ティ】。恐ろしい爆発力を誇る強力デッキだ。

1ターン目からトリシユーラ来なくてよかつたぜ・・・じつちも相当な本気デッキだ！

「俺のターン、ドロー！《BF・蒼炎のシユラ》を召喚！さらにこのカードは自分フィールド上にBFが存在するとき、特殊召喚できる！」『《BF-黒槍のブラスト》！さらに同じ特殊召喚条件をもつモンスター、《BF・疾風のゲイル》！さらにトラップカード《デルタ・クロウ・アンチ・リバース》発動！

このトラップは自分フィールド上にBFが3体以上いるときに発動可能！相手のセットカードをすべて破壊する！』

手札がかなりいい。このまま押し切れるか・・・？

「フン、リバースカードオープン！《和睦の使者》、チエーンして《インフェルニティ・インフェルノ》！この効果で手札を1枚捨ててデッキから《インフェルニティ・ネクロマンサー》を墓地へ送る。さらに《和睦の使者》の効果で戦闘ダメージは0、さらに戦闘では破壊されない」

両方フリー チエーンかよ・・・やられたなあ・・・

「ちつ、カードを1枚伏せターンエンド」

「俺のターン！ドロー！ククク・・・俺は《インフェル=ティ・ミラージュ》召喚！さらにビートルの効果、このカードをリリースし《インフェルニティ・ビートル》を2体特殊召喚！」

「・・・なあ遊戯、恐ろしくレベルの高い『デュエル』ってのはわかるんだけどよ・・・」

「ああ、あの『インフェル・ティ・ビートル』や『BF・疾風のギル』のテキストにある、『チューナー』の文字、あれが何を表わしているんだろう・・・」

「まあ、観てればわかるよな、いまはとりあえず妖斗に勝つてもらわないとな!ところで妖斗が勝つたらちゃんと洗脳を解くことなんかできるのか?」

「ああ、闇のゲームはその独特の雰囲気によつてプレーヤーの心を恐怖によつて支配している。」

妖斗が勝ち、向こうの洗脳が解けるその一瞬に千年パズルの力を使えれば・・・」

「俺には觀うことしかできねえ・・・頼むぞ遊戯!..」

「ああ、まかせてくれ城之内くん

「『インフェル・ティガノ』の効果発動!墓地の『インフェル・ティ・ネクロマンサー』と『インフェル・ティ・デーモン』を「ひとつとまつたあ!」なに!?」

「手札の『ロ・ロクロウ』の効果発動!お前の墓地の『インフェル・ティ・デーモン』をゲームから除外!」

これでコンボはある程度止まる!」

「ふん、『インフェル・ティ・ネクロマンサー』の効果で『インフェル・ティ・ビートル』を特殊召喚。いくぞ、レベル3、『インフェル・ティ・ネクロマンサー』にレベル2、『インフェル・ティ・ビートル』をチュー二ング!」

「「チュー二ング? いつたい何が起こるんだ!」」

「シンクロ召喚！」い、『A・O・Jカタストル』！」

使いやがった・・・シンクロ召喚、この世界で・・・

「まだまだ！レベル5、『A・O・Jカタストル』とレベル1『インフェルニティ・ミラージュ』にレベル2、『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！死者と生者、零ゼロにて交わりし時、永劫の檻より魔の竜は放たれる！シンクロ召喚！出でよ、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」

「？？ミラージュの効果は使わない！？」

「どうせ『禁じられた聖杯』かなんかだろうが。どうせならこっちの方が無効にされても攻撃力が高いしなあ！ヒヤハハハハハ！」  
でた。こいつは、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が出ると某満足さん並みにテンションが上がる。っていうかほんとにリバー  
ス読まれたよ・・・どうすっかな？

「『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果発動！お前の『BF - 疾風のゲイル』を破壊し・・・速効魔法！『禁じられた聖杯』！効果を無効にし、攻撃力を400ポイントアップさせる！」「ふん・  
・・」

「バトルフェイズ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』で『BF - 疾風のゲイル』に攻撃！『デス・ファイア・ブラスト』！！」

きた！

「トラップ発動！『緊急同調』！俺はレベル4、『BF - 黒槍のブラスト』にレベル3、『BF - 疾風のゲイル』をチューニング！黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！『BF - アーマード・ウイング』！」

「妖斗もシンクロ召喚を……あの一人は一体何者なのだ…? モクバ!あの二人の正体はわからんのか!」

「ごめん兄サマ、あいつらは日本どころかどこの情報にも引っかかるないんだ……もう異世界人というしか……」

「異世界だとお!? そんな非イ科学的ものなど存在するわけがない! くそつ、あいつらは何者なのだ……」

ヘリの中では海馬兄弟が妖斗と弘樹の素性を探っていたが見当がつかない。

(ほんとは当たっている)

「ちっ、たしかそいつは戦闘破壊出来なかつたな、ならば…『インフェルニティ・デス・ドラゴン』で『BF - 蒼炎のシュラ』を攻撃! 『デス・ファイア・ブラスト』! ！」

「うぐおおおおつー! がつ・・・・! 」

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の吐いたブレスがシュラを焼き尽くし、そのまま妖斗の体に当たった。

(こりやガチでヤベえ……早く決めないと! )

妖斗 LP 2400

「おれを……満足をさせてくれよ……! 」

## 第7話 友情を取り戻せ！ マイティック3（後書き）

状況説明

妖斗 手札 0

場 『BF -アーマード・ウイング』

伏せ 0

弘樹

場 『インフェルニティ・デス・ドラゴン』、『インフェルニティ・ビートル』

伏せ 0

・・・すいませんこんなガチで。

どこの大会だ！って思います、自分でも。

あ、第6話の『デュエルが色々根本的に間違っていたので、時間が空き次第修正します。

## 1章最終話 決着 新たな旅立ち（前書き）

かつてに1章とか作っちゃってすいません  
この回はいろんな意味でターニングポイントです！

## 1章最終話 決着 新たな旅立ち

「俺はターンエンドだ」

「俺は必ずお前を助ける！ドロー！…」

動作の一つ一つに体が悲鳴を上げる。だが・・・

「俺は『闇の誘惑』発動！」

2枚ドローし、手札の『BF・銀盾のミストラル』を除外！そして『天よりの宝札』！

お互いの手札は0、よつてお互いに6枚ドロー！

「ここまでの手札増強を・・・」

やつぱチートだな、アニメ版の『天よりの宝札』。

この世界に来てカードショップに売つてたんで買っちまつたよ。んで、『両方の』手札を増やすこのカードはなかなかの満足メタ。

「・・・よし！俺は『黒い旋風』発動！そして『BF・蒼炎のシュラ』召喚！黒い旋風の効果で『BF・そよ風のブリーズ』を手札に加え、自身の効果で特殊召喚！んで、『死者転生』！手札を1枚捨てて、墓地の『BF・黒槍のブラスト』を手札に！そして今捨てた『レベル・ステイラー』の効果で、『BF・アーマードウイング』のレベルを1上げて特殊召喚！」

「すごい・・・手札に全く無駄なカードがない。」

すべてのカードが妖斗と『シンクロ』している！

「ああ、そのまま押し切つちまえ！妖斗！！」

（しかし、なんだ向こうの笑みは？圧倒的に妖斗が有利なはず、なぜあんな余裕にしていられる？）

遊戯は1人だけ、弘樹の邪悪な笑みに言い知れぬ不安を覚えていた。

「いくぞ！レベル4、『BF・蒼炎のシュラ』ヒレベル1、『レベル・スティーラー』にレベル3、『BF・そよ風のブリーズ』をチューニング！吹き荒べ嵐よ！鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！シンクロ召喚！『BF・孤高のシルバー・ウインド』！」

妖斗の場にあらたなシンクロモンスターが現れた。

『BF・孤高のシルバー・ウインド』の効果発動！『パーフェクト・ストーム』！

弘樹の場の『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が破壊された。『シルバーウィンド』はこのカードの攻撃力、2800以下の守備力を持つモンスターを2体まで破壊する！まあこのターンはバトルフェイズを行えないけどな。

俺はカードを1枚セットし、ターンエンド

「・・・がつかりだぞ妖斗。お前がその程度とはな

「何！？どういうことだ！」

「もういい、見ていればわかる。ドロー

こいつは何を言っているんだ。インフェルニティは手札0じゃないと動かない。

しかもあいつの手札は7枚。何をするつもりだ？

「・・・『大嵐』」

「う！『天罰』が！」

「さらに『インフェル＝ティガン』。効果で手札の『インフェル＝ティ・ビースト』を墓地へ。」

弘樹 手札4

「まだだ。『鳳凰神の羽根』発動。手札を1枚捨て、墓地の『インフェル＝ティガノ』を

デッキトップへ」

おい・・・ウソだろ？まさか手札7枚から・・・

弘樹 手札2

「『D・D・R』。手札を1枚捨てて、除外されている『インフェル＝ティ・デーモン』を特殊召喚」

まずい・・・本当にまずい！

「デーモンの効果で『インフェル＝ティガノ』を手札に加え、発動。

『インフェル＝ティ・ネクロマンサー』、『インフェル＝ティ・ビートル』を特殊召喚。

レベル4、『インフェル＝ティ・デーモン』、レベル3、『インフェル＝ティ・ネクロマンサー』に

レベル2、『インフェル＝ティ・ビートル』をチューニング。

氷結界に眠りし三つ又の槍よ、今君臨しすべてを喰らえ。シンクロ召喚。

『氷結界の龍 トリシュー・ラ』！――！」

首が3つにわかれた氷の龍が現れた。

「効果発動。フィールド、手札、墓地からそれぞれ1枚ずつカードを除外！」

フィールドのシルバー・ウインド、墓地のゲイル、手札を1枚除外！」

「くつそ・・・」

「まだだ。さらにガンの効果を発動、ネクロマンサーとビートルを特殊召喚。

ネクロマンサーの効果でデーモンを特殊召喚、効果発動。ガンをサ一チする。そして三体をチューニング！再び現れよ、『氷結界の龍トリシユーラ』！効果でアーマード・ウイング、墓地のシユラを除外。

お前の手札は0だ

「そんな・・・」

救えない・・・フィールドは空、手札もなく、対抗手段はない。

俺は・・・俺は何もできずに・・・

「3体目のトリシユーラをシンクロ召喚。お前の墓地のブリーズを除外、

そななものか・・・お前はこんな程度だったのか。

トリシユーラ3体でダイレクトアタック。『フリージング・トリップル・ブリザード』！――！」

妖斗 LP 0

負けた。

救えなかつた・・・親友を。

遊戯、城之内の期待にこたえられなかつた。

「すまない・・・遊 g・・・城 n・・・」

意識が遠のいていく。さあ、敗者には『死』という罰ゲームが残っているのみ。

終わつたんだ・・・

「俺・・・・絶・・・・死・・・・せは・・・・ない！――！」

「妖斗！」

遊戯と・・・弘樹！？

デュエルが終わつたら戻るようになつてたのか？  
だつたらよかつた・・・俺は1回死んでいる、もう何も望まない  
だんだん意識が遠のいていつて・・・俺は・・・

「俺が絶対に死なせはしない！」

千年パズルよ！たのむ！闇の力を振り払い、妖斗を助けてくれ！

千年パズルから光が飛び出し、消えかかっていく妖斗の体に直撃する。

その光が収まつた時、そこに妖斗は・・・・いなかつた。そこに  
は泣き叫ぶ哀れな少年、

弘樹がいるだけ。

「お前・・・・お前のせいで・・・・妖斗が・・・・てめえええ！――！」

「うう・・・・妖斗・・・・俺のせいで・・・・」

弘樹は完全に放心状態で聞こえているのかもわからない。

「やめるんだ城之内君ー！」この子も君と同じでマリクに操られていた。

君ならわかるだろ？！

遊戯が止めに入る。

城の内の叫び声が埠頭に空しく響いていた・・・・・

城之内の叫び声が城頭は空しく響いていた。

どこかの会場？？？

ますますわけがわからない。どうなつている？

つーかあそここの少年・・・

その時ある考えが頭の中をよぎつた。これは・・・

『妖斗・・・妖斗・・・聞こえていますか？』

「お前はエレナ！？おい説明しろ、どうなつてんだこの状況は？」

『あなたが負け、消える瞬間、遊戯さんが千年パズルの力を使って闇を振り払おうとしたのです。しかし、完全には闇を消せずに中途半端になつてしましました』

「そんではまさか・・・」

『ええ、これは・・・』

その時、先ほどの少年が人差し指と中指を突き出し、こう叫んだ。

「ガツチャー！楽しいデュエルだつたぜ！－！」

『「遊戯王GXの世界にーー!」』

ピンポンパンボーン

『試験番号111番 神野 妖斗 試験会場に来なさい』

そう、ここからおれの新たな人生が始まつて行く・・・・

## 1章最終話 決着 新たな旅立ち（後書き）

そう、GXに転生してしまった主人公。  
ここからしばらく無印組はお休み。  
新たな妖斗の戦いをご覧ください！  
原作沿い・・・なはず。いろんな意味で違つけど。

## 番外　主人公設定（前書き）

まあオリキャラの設定です。  
対話形式つて難しい・・・

## 番外 主人公設定

主人公：神野 妖斗

「デュエル大好きな典型的なトリッパー」。

8つのデッキを持ち、その構築能力もなかなかのもの。

一応ドラゴン好き。

厨二の精神を持つており、ウザいやつにはルール無用で容赦なく叩き潰す。

でも基本はノリのいい好青年。ボケと突っ込み両対応。

マリクに乗っ取られた親友の弘樹一（後述）に闇のデュエルで負け、死にかけたが遊戯の千年パズルの力によりGXの世界へ飛ばされる。姿はデスノのライトを黒髪にして少し短くした感じ。

### デッキ集

- 1：【青眼の白龍】 とにかく押せ押せな超パワーデッキ。
- 2：【終世】 『大天使クリスティア』と『光と闇の竜』で相手を制圧し、ヴァルハラや陵墓で上級を出していくハイビート。
- 3：【BF】 展開力を利用したデッキ。ほんとは切り札としてアスマラピスクが眠っている。

他はまた本編で。

「おい」

どうしました？主人公の妖斗君。

「原作でシンクロ使つちまつたんだが大丈夫なのか？」

問題なし。作者パワー。それが小説のいいところつまりは・・・

「『都合主義ですねわかります』

だつたらいいじゃんか。

「あとで、『こんなテーマでキばつかでこの先勝てんのか?』

何いつてんすか。BFがあるじゃないですか。

「もしかして俺ガチそんだけ!?」

やかましい。てかBFもテーマでしょ!。この小説作るときの一瞬  
うかんた草案見せてやるよ。

- |   |                                 |
|---|---------------------------------|
| 1 | BF                              |
| 2 | インフルエンティ                        |
| 3 | 次元帝                             |
| 4 | スキドレバルバ                         |
| 5 | 剣闘獣(ベストロ <sup>3</sup> )         |
| 6 | ライトロード(ルミナス <sup>3</sup> )      |
| 7 | アンデシンクロ(ゾンキヤリ馬頭鬼 <sup>3</sup> ) |
| 8 | 弾圧除去ガジュ                         |

「・・・・すいません聞かない方がよかつたです」

だらうなあ。さすがに自重したんだ。自重しそぎたけど・・・

「で、ガチが一つになつたわけか」

うへん、もう一つくらいは出してもいいかな。さすがにつらいしね。

「そうだそうだ、この先出てくるであろう初手サイドラ3枚男やピンチ時バブルマンドロー率8割を誇る男にBFだけじゃ勝てんだろうが」

なんで？ 引きいいじゃないつすか。

「それを超えるのがかの有名な主人公補正だろ？ が

そんだけか？ 早く他のやつの紹介しないと。

「うつぜえ・・・2人しかいなけどな」

やかましい。とりあえずオリジナル要素は少なくしちゃたいんだ。

「・・・はあ。 そんじゃ次、あのアホ神だ」

（実はシンクロ使つたことで大きな変化が・・・まあいか、後々  
気づくだろ）

セレナ　　自称神見習い　アホ

妖斗を殺した張本人。ペットに『ナチュル・ロック』を飼っている。デュエルはしない様子。神だから出来ないこともないと思うが・・・見習いとはいつたものの、人に比べればどんでもない力がある。一応時間転移と空間転移が得意分野である。しかしあつちょこちょいというかドジといふか、人の話を全く聞かないでの、聞かせるし

かない。

とにかく早とちりにしてデジ。

まだわからないがカードの精霊のようである。

容姿はファンタジースター・ポータブルのHILYIAをロングにして  
ちつちつやくした感じ。

「なんですか」の私アンチな紹介は？アホ？そんな発言した覚えがあ  
りませんよ！」

「気にするな、それに・・・」

うんそいつか、気にしちゃダメ。それに・・・

「2人とも、慰めてくれるんですか！」

「「「」に書いてある」とはすべて真実だから弁解のしようがない」

」

○ RIZ 離脱。

わあ、セリフ2句のアホ神はほつといでだな・・・

「おつ！次いこ、次！」

「ひどいですよー精霊かもしれないという大ニユースがあつたじや  
ないですか！？」復活。

そうだったつけ？オリカだったような気がするが・・・

神だから《オベリスク》とかでいいだろ。

「なんで私があんな筋骨隆々のやつに「ワイトにするよ?」まだか  
わいげがある分まじじゃないですか!」

さて[冗談は]ここまでにしょ。GXからはセレナが精霊として妖斗  
につくらじこからよろ「チヒンジで」

「ガーン……わかりましたよもうあなたの存在やら世界やら全  
て消し飛ばしてあげますよふフフフフフフ・・・・・・  
カアアアアアアア・・・・・

ちょ、妖斗! やばいってあのアホは一応神だつての一死ぬううう  
ううー!

「あーわかったわかった! ……これからよろしくおねがいします! う  
ううう! ……  
シユウカウカウカウカウ ……・・・・・

「ヤンデレ設定あつたんだなこいつ・・・氣をつけよう

つーかほらーいつまでもこんなくだらん! としてないでさつあと最  
後の紹介はいるぞ!

「ぐだらんつておまえな・・・世界の命運かかつてたぞ今のやり取  
りで」

知らん知らん、さあ、お次はーーーの方です!

「どこの歌番だ・・・・

上刃 弘樹

前の世界での妖斗の親友。

遊戯王の世界にいつの間にか存在していたトリッパ。

なぜ遊戯王の世界に来たかはまだ不明。

愛用デッキは【インフェルーティ】。

他にも2、3個デッキを所持している。

妖斗もこの世界にいると思い妖斗の名前を呼びながら探していたところをグールズにつかり、マリクに洗脳されてしまった。

そして正気に戻ることなく妖斗を倒し、やっと洗脳から解放された。しかしこの後の出番はおそらくずっと後だと思われる。

容姿はまんまガッシュの清麿。

「・・・・へ？俺出番ないの？？」

悪いね～GXに飛んじゃつたもんだから、無印のキャラにかまつてる暇がないのさ。

「俺今なかなか活躍中じやね！？妖斗がいなくなつてから・・・とか作ればよくね？」

大丈夫大丈夫。君のその後は妖斗のほうでわかるはずだよ。

「新キャラなのに・・・新キャラなのに扱い悲惨・・・」

じるマイペースマイ！明日がまたあるー！

「そのジンマイのカタカナ具合がさらにうぜエー。」

やかましいー そんじや、この駄文に付き合つてくれるところは、  
またの更新を待つていてください！

「終わらせ方が強引すぎる！まだいろいろあるだろ？が…！」

だつてさー？空気になつた主人公と神様がすねてるんですもの。

「まあ……そんじゃ、」これからもよろしくな

ハイテンションプリーズ！

「……………」

## 番外　主人公設定（後書き）

すいません・・・書けば書くほどグダグダに・・・  
次回は本編に入ります！

## 第2期1話　vsクロノス　マイティック4（前書き）

やっと始まりました、第一期。

主人公の「ティック」が明らかに積み込みですが、仕様という事で。

## 第2期1話 √Sクロノス マイティック4

まじか・・・GXに転生するとは・・・

「なにをボケつとしているノーネ？早く始めるノーネ」

相手クロノスだし。

「わかりましたよ、始めましょ！」

「「デュエル！！」」

「先攻は私なノーネ、ドロ～によ！まずは手札から《パワー・ボンド》発動！手札の《古代の機械巨人》と《古代の機械巨竜》2体を融合！現れるノーネ！《古代の機械究極巨人》！《パワー・ボンド》の効果により攻撃力2倍の8800！さらに《サイバー・ジラフ》『召喚！効果発動、リリースしてこのターンの効果ダメージを無効にするノーネ』

・・・・＼（。ロ＼）（＼ロ。）／・・・・

突っ込みどころ多すぎないか？カイザーのカードまで！？

「ターンエンドなノーネ」

「…俺のターン、ドロー。」

もう俺は、自重なんてしない！

「手札から《ドラグ一ティ・ファランクス》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！」

《クイック・シンクロン》を生け贋にして、《ドラグ一ティ・プリムス・ピ尔斯》を召喚、効果発動！

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

自分ファイールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついた鳥獣族モンスター1体を選択して発動する事ができる。

自分の「デッキからレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を装備魔法カード扱いとして、選択したモンスターに装備する。

「俺は『ドラグニティ・パルチザン』を装備する…さらに魔法カード『二重召喚』でモンスターをセット！『太陽の書』発動！セットモンスターは『メタモルポット』！手札はゼロ、よつて5枚ドロー！」

「私も5枚ドローなノーネ…・・・グヌヌウウ、シンクロ使いとは癪な奴ナノーネ」

「は？ いま何と？」

「だーかーら、シンクロを使うなんて新入生にしては癪に障るといつたノーネ！」

「なんで先生がシンクロ召喚を知っているんですか…？それにまだシンクロ召喚もしていないのに…！」

「なんでって、シンクロ召喚はつい最近、あの伝説のデュエリスト、海馬瀬戸と上刃弘樹が共同制作した画期的なシステムなノーネ、そりやみんな知っているノーネ」

なんてこいつたい、弘樹のやつ、あの後何したんだ？

「つかぬことをお伺いしますが、第一回バトルシティで優勝したのは誰ですか？」

「常識の常識なノーネ、伝説の『テュエリスト』、武藤遊戯と上刃弘樹が劇的な引き分けで同時優勝したノーネ」

うわ～・・・あいつそんなとこまで行つてたのか、だからシンクロ召喚も世間的に知られてしまつたわけか。

「おしゃべりが過ぎるノーネ。早くターンを進めるノーネ」

「あ、すいません。だつたら遠慮はいりませんね、まだまだいきます！」

とはいってもワンキルは無理そつだな。

「《シンクロ・ヒーロー》を《メタモルポット》に装備、効果でレベル3になつた《メタモルポット》に《ドラグ一ティ・パルチザン》の効果でチューナーとなつたレベル5の《ドラグ一ティ・プリムス・ピルス》をチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる。光さず道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！カードを2枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、、私は《古代の機械究極巨人》で、《スターダスト・ドラゴン》に攻撃！「手札から《クリボー》を捨て、戦闘ダメージをゼロにする！」ちつ、カードを4枚伏せてターンエンドなノーネ」

4枚も伏せやがつた・・・攻撃反応かそれともブラフか？まあ何だろうと関係なし！！

「このターンで終わりましょう、俺のターン、ドロー！《強欲な壺》発動、2枚ドロー！セットカード、《地碎き》！《古代の機械究

「極巨人》を破壊！」

「しかし、究極巨人の効果で《古代の機械巨人》を特殊召喚する  
ノーネ」

「これがねらいですよ、《ドラグニティ・ドウクス》召喚！効果で  
《ドラグニティ・ファランクス》を装備し、ファランクスの効果で  
自身を特殊召喚！レベル4の《ドラグニティ・ドウクス》にレベル  
2の《ドラグニティ・ファランクス》をチューニング！

伝説の竜騎士、その槍をもち全てを貫け！シンクロ召喚！《ドラグ  
ニティナイト・ヴァジュランダ》！効果で墓地の《ドラグニティ・  
バルチザン》を装備、チューナーとなる！

さらにまたまた《二重召喚》、《ファンтом・オブ・カオス》を召  
喚！効果で《スターダスト・ドラゴン》を除外し、「ピー！」

「な、なにをする氣ナーノーネ？」

「今見せてあげますよ、このカードはシンクロモンスターのチュー  
ナーと《スターダスト・ドラゴン》でシンクロ召喚する！レベル4、  
《スターダスト・ドラゴン》にレベル6、《ドラグニティナイト・  
ヴァジュランダ》をチューニング！集いし夢の結晶が、新たに進化  
の扉を開く。光さす道となれ！アクセルシンクロオオじょうらい！生来せよ  
！《シユーティング・スター・ドラゴン》！！」

「な、何、なノーネこのモンスターは…？」

「おおお～すっげえ！見たことないモンスターだぜ！」

「あんなモンスター召喚できるあの人のタクティクスもすごいっす  
！～！」

「綺麗・・・・・」

「あい」「あいつはなかなか興味深い新入生だな」・・・・

わめいてるわめいてるギャラリーも。俺が深く付き合つのは十代、翔、明日香、サンダーになつてからの万丈目、カイザーくらいかな。・・・・ん？俺はあえて言わないよ、やつは自然にそばにいる。そう、たとえるなら『空気』のよう！・・・

「《シュー・ティング・スター・ドラゴン》の効果発動！自分のデッキの上からカードを5枚めぐり、このターンこのカードはその中のチュー・ナーの数まで一度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる！」

「ふん、ならば《サンダー・ブレイク》発動！手札を1枚捨てて、《シュー・ティング・スター・ドラゴン》を「悪いな、シュー・TINGスターの2つ目の効果！フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる！」ヌウ、だつたら《非常食》！3枚のカードを墓地に送つて3000回復ナノ！ネ！これでライフは7000、4回攻撃しないとこのターンで私を倒すのは不可能なノーネ！5枚中4枚チュー・ナーは相当低い確率なノーネ！」

「確かに、だが俺は奇跡を起こす！一枚目！チュー・ナーモンスター！、《ドラグ二ティ・コルセスカ》！2枚目！《デブリ・ドラゴン》『！3枚目エ！《ジャンク・シンクロン》！4枚目！！《ドラグ二ティ・アキュリス》！！そしてラスト5枚目！！チュー・ナーモンスター、《グロー・アップ・バルブ》！…！」

「そ・・・そんな・・・5枚ともチュー・ナーデスー・ノ！？」

「行くぞ、《シユーティング・スター・ドラゴン》の攻撃……」「  
スターダスト・ミラージュ」グオレンダア！「5オ連打ア！！！」

「ペーペロンチ～ノ！！！」

クロノスLP 0

あ・・・危なかつた・・・まさか先攻1ターンで8800の貫通持ちが出るとは。

ついが原作とずれすぎだろ、時空が歪んでる的なテンプレか？

「文句ないノーネ、7000ものライフを1ターンで0にするとは、文句無しでライイエローに配属スル・ノ」

まだ、なんか違和感あるな。初期のクロノスってこんなやさしかったか？

(あの～・・・・・)

おお、空氣と化していた神様じゃないか。どうした？

(「この世界は遊戯王GXであって、GXではあります・・・」)

?・?・?ビリビリといふことだ？

（一種の並行世界とでも思つてもうつたらいこのでしようか？基本的な設定そのものは変わってませんが、キャラの設定や時間の流れが色々変わっています。あのクロノスは改心した後です）

ほひ、だから新入生にもあんなやせっこのか、キャラ設定かわってるところひょっとめんどいそうだな。

「・・・と言いたいところデスーが、筆記の時にマークは名前を書いてないノーネ、点数自体は満点なの一、もつたいないことをしたノーネ」

・・・・・なにせってんだ俺。

「よつて、オシリスレッドに配属するノーネ」

マジかよおおおおお・・・・・



## 第2期1話 √sクロノス マイティック4（後書き）

ティックとしては、【シユーティングスターを出したい】  
とでもいつときましようか・・・

バルチザンでドラグニティナイトをチューナーにして、ファンカス  
でスターダストコピットシユーティングスター出しましようと。  
ほとんど出ませんが。

次回予告 この時間軸のズレが原因で、入学式からとんでもないこ  
とが・・・

## 第一期2話 もやかの開拓—マイテック5（前書き）

原作崩壊も甚だしいので、『注意ください』。

つじつま合間に強引な設定持ち込もうともある・・・かも？

## 第一期2話 まわかの開催—マイティック5

・・・・といつわけで、はれて入学して入学式まで各自寮で待機・  
なんだがなんだここは。元いた世界にあつた住宅街の裏路地にある  
ぼろアパート・・・  
まではいかないにしてもぼろいな・・・まあ、俺は何故か1人部屋  
だから良いほうか。

よく十代たちはこんなところで3人部屋でいけるよな。ってか俺まだ  
十代みてないんだが・・・どこの「おーい！お前、俺の1っこあと  
のスゲーモンスター召喚したやつだよな！俺とデュエルしようぜ！」  
いたいた。こいつはキャラ設定変わつてないみたいだな。二十代じ  
ゃなくて一安心だぜ。

「いや、後にしよう。入学式始まつちまつぞ。」  
「いまはまだやりたくないし。

「なんでだよーまだ全然時間あるじゃんかー！」  
「めんどくせーな、ここは口車に乗せとくか・・・

「俺が見た限り、お前はトップクラスに強いデュエリストだ。俺も  
腕にはそれなりの自信がある。俺らがいまデュエルしたら相当な熱  
戦になつて時間がかかるだろ?」

「お、おうーそうだな！又後にしようー『強いデュエリスト同士』  
な！」

・・・・すっげえ笑顔。そんなうれしかったのか。  
「おう、んじやまた後でな！」  
よし、くつろぐじゃ。

ピーンポーンパーンポーン

『ただいまより15分後、入学式を行います。各生徒、教職員は会場までお越しください』

「お、そろそろか」

つていうか入学式なんてイベントあつたつけ?こまさりだが。  
(ないですよ、それに変な予感がしますから一応テッキを持つて行つといった方がいいですよ?)

お、そうか。てかなんでそんな出番少ないんだ?

(向)うの神界がいま(たつこ)るんですよ、今しばらく出てこれないのと、あなたのテッキにあつた精靈派遣しどこたんで来ると思いますよ)

俺のテッキ?あと4つの中のどれかってことか?

(はい、わざわざししたら来ると思つたで、仲よくしてやつてくだれこーそれでま~)

・・・・・血(け)だけ血(け)消えやがつた。  
しかし、精靈つて誰だ?気になるな。  
「つづと、こそがねーとー遅れちまうぜー!」

そういうつて俺はとびだしていった。

まさかあんな特大『イベント』が起るとは思わずには・・・

「言ふことは、眠い。」

「・・・それでは、これからも勉学にデュエルに励んでください」

お・・・終わつた・・・死ぬかと思つた・・・

「次に、生徒全員に連絡です」

九月

「知ってる人、そうでない人いると思いますが、今日よりいきなり、この島でプロアマ学生問わず戦う大会が開催されます！」

「……は？それって第二期の『その名も！『ジエネシクス』！』

フーフー

う、ウソだろ？このタイミングでジエネックス！？万丈目もまだサンダーになつてないのに！？

「優勝はこの万丈目サンダーがいたいた！」

なつてた。

「優勝はこの僕！天～～～～～～～～～～？」

「ジニアイン――――――」

#U# - - - - - #U# - - - - -

・  
・  
・  
いた。

そうだ！イヤッホオオオオオオオオオオオオオオはー？

「え、ジェネックス開会式において、スペシャルゲストをお呼びしました！」

ワーラー

もうわかつた。  
オチが。

「イイイイイイイイイイヤッ ホオオオオオオオオオオオオオオオオ

校長が宣言した瞬間ドームの天井突き破つて奇声を発したエドがパラシューートで降りてきた・・・

「みんなヨロシク。エド・フニークスだ」

ウオオオオオオオ！・！・！

くそっ・・・・・じつせうじにないその他諸々もどつかでいるんだろう  
うな。

・・・・「え～それではルール説明を～」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ルールは適当に聞き流す。どひせ勝てばいいんだろ?

「ではこれにて、入学式兼ジエネックス開会式を終了します！開始時間は2時間後！」

各々デッキ調整などを欠かさないようこー！」

そんな馬鹿な・・・これは原作のズレとか言つてる場合じやねえぞ。  
崩壊してんじやねえか。

幸いデッキの数には触れられなかつたな。

俺のデッキはあと4つ・・・なんだが・・・・・えー？

無印の世界で使つたデッキが無くなつてるーどひせじうことだー！ー？

・・・・そのあとも探してみたがどこにもなかつた。

「くそ、この残つた4つでやるしかない・・・が、ラスト一つはあまり使いたくねーな。だがとりあえずデッキの調整しこいつか・・・

・

2時間後・・・・・

『デュエル・・・開始イー！ー！ー！』

「なー?」このフレーズは!某海馬の側近が来てるところのか!

「!」そりやつて放送に突っ込みながら俺のジェネックスが始まった。

「おーい妖斗!デュエルしよ!デビルバット○ーストオオー!ー!ー!  
おおおおおー!ー!」

開始5秒で敗北フラグ立てられてたまるかあー十代め!

・・・・・

「おー、デュエルしよ!」

「キングのデュエルは常にエンターテイメントでなければならぬ  
!ー!ー!」

変な声が聞こえるけどムシムシ。

「まわたりDEATH GAME!...!」

「俺は・・・・負けたくないいいいいつ...!...!...!」

へんな声が聞こえ（「」）

「きみ、僕とデュエルしないか？」

・・・・・Hドですか。これは十代再起不能フラグぶち折れとのお告げか？

そういうばこいつはTFでカモにしてたなあ、いっちょ逃げないでやりますか！

「いいぜ、デュエルだ」

「君はすでに敗北の運命に見定められている、僕の勝利はゆるぎない！」

「そんなもん俺がぶち破つてやるよ、いくせー」

「「デュエル!...!」」

「僕の先行、ドロー！カモン！《D·HERO ダイヤモンドガイ》！エフェクト発動！」

デッキの一一番上は、《テストナー・ドロー》…次のメインフェイズに効果発動が確定した！

カードを一枚伏せてターンエンダだ」

でたでた、ダイヤモンドガイのチート発動。斎王様並みの運命力じやんよ。

「さあ、行きますか、俺のターン！《マンジュー・ゴッド》を召喚！効果でデッキから《高等儀式術》を手札に加える！

《高等儀式術》発動、デッキから《ガード・オブ・フレムベル》を墓地へ送り、

手札から《サクリファイス》を儀式召喚！！」

（やーっと呼んでくれたか、マイマスター！）  
・・・・・へ？

なんか前で一つ目のキモイのが喋った様な気がするけど、そんなわけないよな！

幻聴だよな！違うよな！！

（なーに言ってんだよ、俺はカードの精霊さ、《サクリファイス》の精霊さ！いままできづいてもらえないでさみしかったぜえー？）

い・・・いやだ、いやだいやだあー！！！  
なんでだよ！もつとかっこいい『ピー！…！…！』シリーズとか（ネタバレにより規制）あるだろおー！？

（あ、そいつらもいるぜ？ただマスターがこのデッキを一番最初に

使ったから)

「おい！何をぶつぶつ言っている！君のターンだ！」

「あ、悪い悪い。ちょっと作戦タイムでな。

よし、出ちまつたものは仕方ねえ！力を貸せサクリファイス！」

(まーかせな！)

「俺は『サクリファイス』の効果発動！ダイヤモンドガイを吸収する！いくぜ、バトル！マンジュ『サイクロンヒッヂでダイレクトアタック！」

「ちいっ、だがもう一体は通さん！速攻魔法！『サクリファイス』に装備されているダイヤモンドガイを破壊！」

「ぐ、俺はカードを2枚セットしエンド」

エド LP 2600

よし、とりあえず先手は取った。ここからか主人公補正。

「僕のターン！ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『デステニー・ドロー』の効果発動！

カードを2枚ドローする。僕は『D-HERO デビルガイ』を召喚！

さらにフィールド魔法、『ダーク・シティ』！

この効果で僕の「D-HERO」と名のついたモンスターが攻撃する時、

攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！

行くぞ！バトル！デビルガイでサクリファイスに攻撃！

「させつかよ！罠カード《亜空間物質転送装置》！サクリファイスをこのターンのエンドフェイズまで除外する！」

「ならば巻き戻しが成立し、《マンジュ・ゴッド》に攻撃！《ダーク・シティ》により攻撃力は1600！さらに手札から《D・H.E.R.O.ダガーガイ》を捨ててさらに攻撃力が800アップ！」

「ちり・・・・」

どうせサクリファイスの効果で吸収されるのわかつてやがんな。

妖斗 LP 3000

「2枚セットしてターンエンド」

「エンドフェイズに除外されていたサクリファイスがフィールドに戻る」

「俺のターンだ、ドロー！サクリファイスの効果で、デビルガイを吸収！」

(「うちに来なあ！ていつーはつーちえいつーじすつとーちゅーつとなーぐちゅー！」)

うわ・・・さつきはわからなかつたけどグロツ・・・R15指定い るかな？

放送禁止~~~~~

「一気に攻める！俺は『魔道戦士ブレイカー』召喚！効果で魔力力  
ウンターを乗せて取り除き、その伏せを破壊する！」

「つ、まずいな・・・」

一気に攻め込む！

「バトル！ブレイカーでプレイヤーにダイレクトアタック！」

エド L.P 1000

何勘違いしてんだ！まだ俺のつていいてえ！！！

「さりにサクリファイスでダイレクトアタック！」

(見てるよ、ほいやつ！ムーコッ！ぐちゅつー)

「があああああああつ！つえつ・・・」

・・・・・『めん、エド・・・・・・・・

「エンドだ」「エンドフェイズに『スケープ・ゴート』発動！」  
なに？なんでダイレクトアタックの時に使わなかつたんだ?  
・・・つ！まさか、あのカード・・・もう持つていたのか！？

エド L.P 400

「僕のターン！来てくれたか・・・」

僕は羊トークン3体を生け贅に捧げ、カモン！最強の『D』、『D

- HERO B100-D』！！

なつ！やつぱりもつてやがつた！エドの父親が作った『D』・・・

「『D - HERO B100 - D』！ エフェクト発動！ 僕はお前のブレイカーをもらう！ さらに攻撃力が半分の800ポイントアップして2700！」

「…………それだけじゃないんだろ?」

「ほら、知っていたか、その通り！」このガードが自分「ハイカルト上に表側表示で存在する限り、

相手ファイールド上に表側表示で存在する効果モンスターは全て効果  
が無効化される！」「

く、サクリファイスが丸裸に・・・

「バトル！『D - HERO B100 - D』！サクリファイスに攻

妖斗 L P 300

「アーネンヒンデ」

まずいな、  
だが初戦なんかじや負けらんねえ！

「俺の・・・ターン！」

「一気に行くぞ！まずは『天よりの宝札』互いの手札が6枚になるまでドローする！墓地の『マンジユ・ゴッド』と『サクリファイス』を除外して『力オス・ソーサラー』を特殊召喚！リバースカードオープン！『D・D・R』！手札を1枚捨てて、『サクリファイス

『を特殊召喚！まあ、いじうか！』

（ま～かせんしゃい！俺のモンスター効果で「使えねえよ」ガビ～ン～）

「でもデュエルの勝利のための力、ギはお前だ！《死者蘇生》！墓地の《ガード・オブ・フレムベル》を特殊召喚！レベル1、《サクリファイズ》とレベル6、《カオス・ソーサラー》にレベル1の《ガード・オブ・フレムベル》をチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

「シンクロモンスターか。だがそれでは僕にどぎめは刺せないぜ」

「ああ、このモンスターじゃ無理だ。だが、さうに上があると言つたら？墓地の《ゾンビキアリア》の効果！手札をデッキトッピングへ送つて特殊召喚！最後の手札、チューナーモンスター《クレボンス》！いくぞおつ！レベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル2の《ゾンビキアリア》と《クレボンス》をダブルチューニング！」

「ダブルチューニング！？チューナーが2体だと…？」

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ！天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚！いでよ、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》『～』」

「攻撃力が・・・3500！？」

「楽しいデュエルだつたぜ！《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》

の攻撃！

『バーニング・ソウル』……』

「ぐああああああああああああああ！」

エド Lp 0

おっしゃ 初戦初勝利！

イイイイイイイイイイイイイイイイイヤッホオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オ！！！

「つ、この僕が・・・負けた！？そんな馬鹿な！」

「強かつたぜーあと一歩だつたんだ、また『テュエル』しようぜー！」

「当然だ、僕に負けるまで誰にも負けるんじゃないぞー！」

「おーい！妖斗ーーー！」

お、十代。

「『テュエル』してたのかーこの様子だと勝つたん・・・だ・・・な、  
なあ、妖斗？」

どうしたこいつ。なんかにおびえてる？いや、違うな。なにか・・・

「お前の後ろのやつ、・・・お前の精霊か？」

（ハロー、ベイベー！そのどうづ、サクリファイスだ！よろしくなあ

(一)

「お・・・・・おひ・・・・・よ、よろしくな!」「氣持ひ悪こよなあ、やつぱし。サクリファイスつねにやつなんて見た事ねえよ。

「よーし氣合入つてきたー妖斗!決勝で戦おひぜー!」

「のどむとこりだー負けんなよ、十代!」  
そうこつて走つていぐ十代を見送るのだった。  
(ヘイマスターーー)れからもヨロシクなー)

「あ・・・ああ、よろしくーーできればスキンシップはやめてくれー!」  
ぬるぬるかねからーー!

なんだかんだで精靈が来た今日だった。

## 第一期2話 まわかの開催ーマイテック5（後書き）

はいそうですジェネックス開幕！

さらばHDDに勝利！

精靈はサクリファイス！

むちゅくちゅ新設定出てきました。

デッキは【サクリファイス】。

あのよひに回れば我が魂とか結構です。

このデッキは2軍に当たる結構主人公にとつての本命デッキです。

## 第一期3話　∨s謎の少年　連鎖する謎（前書き）

いや別にタイトルほど重大ってこともないんですけど。  
一応この回新キャラと新精霊が出ます。

# 第一期3話　ＶＳ謎の少年　連鎖する謎

「いけ！ サクリファイス！」

八九

『ホルスの黒炎童』!!わあああああああああ!!!!』

win!

「『ドラグニティ・アームズ レヴァテイン』！」

不思議

『俺の『カタバルト・ター・トル』が！！ちくしょおー！』

W  
i  
n!  
!

「サクリファイスのダイレクトアタック！」

ケミツ・・・

「ぐはつ・・・負けたぜ！いいデュエルだつた！」

W  
i  
n!  
!

「サクリファイスの効果発動！ 吸収！」

「《ウホーターデラゴン》！」

「ダイレクトアターック！」

「・・・ち、負「なかなかいい」トユエルだつたぜー」・・・・・

win!

とりあえず初勝利からしばらく、【サクリファイス】と【ドラグニティ】でモブキャラたちに連勝している。・・・なんかメインっぽい強さの奴もいたが、気のせいだよな！

(マスター調子いいねえー！俺ただけでいけるんじゃないの！？)ちーとつらーと思つがな。実際後3つはガチ目だしな。最後1個なんて好きなやついないだろぜつてー。

(確かに最近のデッキじゅママスターのラストデッキに対抗しひらりだらうなあー)

だから最後の最後まで使いたくはないな。まあ・・・その前の2つも強いんだけどな。

ラストは相手に『える絶望感がダンチだ。  
(まあほひぢりやつてこひづれ、そろそろ強こやつとも当たるそじゅねーの~)

そうだな、まあお前らもがんばってくれよー。

とまあ雑談しながらのへんを歩いてみると、「お~い、僕とデュエルしようよー。」

ん・・・モブ特有の単調な顔でもないが、原作にこんなやついなかつたよな・・・

イレギュラーか？

「なんか気になる?」

「あ、ああ、悪い。ちよつとな。や、デュエル始めようか」

「僕の正体がわからないんでしょ?」

「ああ?お前何者だ?」

「君が勝つたら名前や正体、その他諸々教えてあげるよ。まあ始めよつー。」

「この世界じゃどうせひとつなるのな。行くぞー。」

得体が知れん、サクリファイスにはすまんが『ラスト3』使いだー。(了解だ!勝てよマスターー!)

「ああ、デュエルーー!」  
「あれ?向ひつの掛け声は?」

「ハツ!デュエルだあーーー!」

・・・・・トリッパ。150%トリッパ。

「俺の先攻、ドロー！俺は《デルタフライ》召喚！」

さらに《デルタフライ》を除外して《レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン》特殊召喚！

効果発動、手札から《ホルスの黒炎竜 LV6》を特殊召喚！カードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「・・・【お触れホルス】はわかつてたよ。デュエルする前に精靈見えてたから」

なにい？まさか・・・

(やつと出会えたな、我が主よ)

LV6、か。なかなか頼りになるじゃねーの！よろしくな！

(ああ、全力でやつらの相手をしようじゃないか)

クールな戦士つてここだな。性格は。どこの一つ田とは正反対か？

「つーか君精霊見えるのか」

「うん、まあみてな、デュエル始まる前にトラップじつそり抜いといたから、そんな抑止はできないよ！」

「・・・・・・」

「僕のターン！ドロー！僕は《レッド・ガジェット》と《マシンナーズ・フォートレス》を捨てて、《マシンナーズ・フォートレス》を墓地から特殊召喚！」

さらに《永続魔法》《機甲部隊の最前線》発動。バトル！《マシンナーズ・フォートレス》でホルスを攻撃！

「リバースカードオープン、《収縮》！」

「つづ、『機甲部隊の最前線』発動！さらに『マシンナーズ・フォートレス』の効果！『通さん！『天罰』！手札を1枚捨てて無効！』ちつ、僕は『マシンナーズ・ギアフレーム』を特殊召喚！僕はメインフェイズ2に『壺の中の魔術書』発動！互いに3枚ドロイ。4枚セットしてターンエンド」

？？？ LP 2950

「ひとつ言つていいか？」

「ん、なに？」

「『テッキでよく使われるキーカード』が見えたからって、『そのテッキ』とは限らないんだ」

「？？？どういう意味？意味分かんないよ？」

「まあみてな、このターンでおまえに勝つ！」

「ふーん、でも僕はこの伏せについて何にも説明しないよ、自己説明敗北フラグは立たないね」

「そのセリフが死亡フラグだという事にきづけ……」  
若干天然入ってるな。

「俺は『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』の効果で手札から『マテリアルドラゴン』を特殊召喚！  
『レベルアップ！』ホルスをLV8にレベルアップする」

ならチヨーンして『非常食』、『機甲部隊の最前線』含む伏せカー

ド2枚を墓地に送り3000ポイント回復！

? ? ?  
L P 5950

卷之三

「バトルだ！マテリアルで《マシンナーズ・ギアフレーム》に攻撃！」

「△△△」

? ? ? LP 5350 「トライブ發動！《光の護封壁》！」30  
00 ライフを払つて攻撃をさせない！」

? ? ?  
L P  
2350

「大方次のターン『マシンナーズ・ギアフレーム』つかつてなんかするつもりなんだろ？言つたはずだ！このターンで決めると！使いどこにを間違つたな！速攻魔法、『禁じられた聖杯』発動！」

「なつ！？まさか……」

「対象は『ホルスの黒炎竜』LV8』！攻撃力3400！」

「ロックを・・・突破した！？」

「いけ！ ホルス！！』『ブラック・ホルス・ギガファニア』！！』

? ? ?  
L P  
0

「・・・・・負けた、か」

「「やあ、お前の名前を教える」」

なつー？ネタに走ったのはいいがなぜ声がかぶつているんだ？

「いや、言ひと思つたんだ。それより、あの【テッキ】、ただの【お触れホルス】じゃないね？」

「ああ、あの【テッキ】には『王宮のお触れ』は入つてない。その代わりに効果モンスター対策のカードを多量につんだ、魔法、効果モンスター対応型の【ホルス】だ。

さあそろそろ名前を教えてもらおうか」

「僕の名前は・・・・・上刃 爽<sup>そう</sup>」

「なにつー？上刃！？」

ま・・・まさか！？

「お前、あの爽か？弘樹の弟のー？」

「僕の兄は上刃 弘樹さ。あっちの世界ではお世話になつたね。な

んか声も顔も変わっちゃったんだけど・・・

「ああ、どうりで気づかないわけだ。お前なんか今ガツ○ユのウオ○レイみたいな姿してるぞ。

髪は黒いが

このガツ○ユ兄弟が。

「で、お前は何でここにいる？」

「わかんないよ。兄貴がこの前急にいなくなつたんだ、それでカーデショップでも行つてんのかなと思って、探しに行つてみたら、突然このカードがね、光つたんだ」

『マシンナーズ・フォートレス』か。さつきのも精霊だつたのかな？  
「んで、気づいたらアカデミアにいたんだ。なんか色々オスだけど」

「おかしいだろ、いきなりジェネックスとか、いろいろ

「あ、あのね、十代が来る前に僕が三幻魔やらいろいろ倒しといたんだ。そしたらバランス崩れちゃつたみたいだね」

「おい・・・なにしてん・・・っ！」

そのとき、俺の心の中に得体のしれない怒りが・・・

「おまえ、まさか魔界のイベント消化したんじゃなかろうな？」

「うん、いったよ。聞いたやつた 生の若〇ヴォイス！！」

「わーっ！！まつたまつた！録音してるから！ちゃんと録つてあるからあつ！」

生じやなきや意味かなし

(すまん、今の我が主に逆らうと我がとばつちり食いそうなのでな、怨むなら主を怨め!『ブラック・ホルス・ギガファイア』!)

「理不須一...」

俺が正気を取り戻した時には、目の前に黒焦げの物体が転がっていました。

(まつたく何をしてるんだか。その苦○とやはそんなに魅力的な声をしておるのか？)

(さあな)？でもちょっと聞いてみたいなあ）あのマスター、毎回デュエルが終わるたびに対戦相手に「廃寮で何か起こったの知ってる？制裁タッグデュエルってやつだ？？」って聞きましたからなあ）

(まあ)の主人のもとでは退屈しない日々が遅れそうだな。もしかすると我をさらなる高みに上げてくれるかもしけん)

（ダンナ、あの姿にはなれたのかい？精霊界で何回もチャレンジしてるって聞いたぜ？）

（恥ずかしいが『アレ』になるためには何かが足りんらしいのだ、今もそれが何かはわからんがな）

(なるほどね）確かにマスターには何かを感じる・・・俺もカツコ  
よくならないかな！すらりと長い脚！あこがれるぜえ！――（

(貴公がそんな姿になつたら・・・主は無事でいられるだらうか?  
?おもに精神的な面で)

(失礼だぜ、ダンナ！まあ、これからよろしくなー！あいつらもそろそろ使つてもらえるだろ)

（ああ、これからもサポートしないといけないか、今少年に向ってシグロツクをかけながら殴っている、あの少年を、な）

「おいサクリファイス！ 吸収だ！」二つを吸収しろ。（お呼びだ、いつでこい）

(あこよ〜いぐぜ少年！覚悟しろオオオオ！)

! ! ! !

アカデミアに、少年の悲鳴がこだました。

## 第一期3話　vs謎の少年　連鎖する謎（後書き）

【ホルス】です。普段は『天罰』とか『わが身を盾に』とかで効果モンスターの対策に特化した『デッキ』。

大会とかではサイドにお触れ入れとくとすぐスイッチ出来ます。

この回ではおまけ程度の『デュエル』と、新キャラを出しました。

いろいろな伏線はつといたんで、今後につなげていこうと思います。

とくにホルス強化フラグを。

サクリファイスは・・・さすがに長い脚は・・・・・

第一期4話　いや精霊界！そびえたつ『塔』（前書き）

この回はタイトル通り精霊界への旅立ちです。

デュエルは今回はありません。

## 第一期4話 ござ精靈界！そびえたつ『塔』

「ねえ、妖斗兄？ひとつ頼みがあるんだけど」

「なんだ？」

「その【サクリファイス】、僕に『返して』くれないかな？」  
かえして？あ、そうだった。あんまり長く使ってたから忘れてた  
ぜ。

もともとの【サクリファイス】は爽のデッキだった。ただあまり  
に回りすぎたから相手がいなくなつて、封印の意味も込めて俺にわ  
たしてくれたんだったな。

俺が使つてもよく回ると思つたが、こいつが使つヒマジドトラウマ  
もんだ。

「……どうだ？ サクリファイス？」

(俺の元々の持ち主は、さう、いや爽だったかー・マスターも気に入  
つてるが、どうせなら一番強いやつのところでおもいつきりまし  
てほしいかもな！)

「掛けたつもりか？まあいい、俺も、さう、思う。強いやつのほう  
が、お前にとつてもためになるからな。  
爽はまたなんで封印を解こうと思つたんだ？」

「爽つてなんで、さう、いっぱい掛かるのかな？」

「やべ、こう名前をしてるお前が悪い」

「ああ、そう、ですか。【マシンナーズ】もいいんだけどね。さすがに十代とかに勝てないんだよなあ。この世界には僕が本気でブンまわしても目立たない人たちが大量にいるしね」

「全面的に同意。じゃあ、爽をサポートしてやつてくれよー。」

(任せろマイマスター！ん今は元マスターか？でも渡していないからまだマスター？でももう同意も出たし元マスターなのか？いやしかしい？「めんどくさいんだよ！ぼれ爽。」この扱いは難しいぞ「じゃあな、元マスター！」)

「「切り替えはやつ！..」」

「たくこいつは・・・・

(主よ)

「ん？ホルスか。いまは」→8の姿・・つてか  
「自由にレベルアップダウンドできるのか？」

(ああ。4になることはあまりないが、6だと動きやすくな。基本は6でいようと思つ)

「じゃあ今はなんで？」

(8の姿だと心が落ち着いてな。話したいことがよくまとまる)

「ん？なにがあるのか？」

(ダンナ？もしかして？)  
ん？何だサクリファイス？

(ああ、突然で悪いが精靈界に行つてはもらえないか?)

「精靈界? また急な話だが、どうした?」

(我ら『レベルモンスター』は、昔からLV8までが限界とされた  
いた)

…LV8が限界? でも確か…

(ああ、つい最近、といつても結構前だが、ついに『アームド・ド  
ラゴン』のやつらがLV10の姿になった。奴等はその圧倒的な力  
を振りかざし、我らの故郷、『レベルマウンテン』を独占していく  
な)

「攻撃力で言つたらお前も変わらないんじゃないのか?」

つかむしろ『アルティメット・インセクト』とかだったら勝てるん  
じやないのか?

(いや、精靈界は攻撃力だけでは決まらない。しかしで言つ、効果  
や、やはり肩書きや名前も関係している)

ふーん。やっぱこっちの世界とは違つんだな。で…

「俺は何をすればいいんだ?」

(手伝つてほしい。といつても、奴等を倒すのは我らだ。主に手伝  
つてほしいのは我が…さらなる高みへ上るためのサポートだ)

「そりなる高み?」

(ああ、我も、奴等に対抗できる力を…LV10にならなくて  
はいけない)

・・・オーラ、タグに「オリカあり」つけるのかー？

「はじめて聞くぜ、そんな姿」

（我也何度か挑戦した。あそこには『レベル・タワー』という塔があつてな。その最上階に行けば古の力が手に入るらしい。実際、『アームド・ドラゴン』はその最上階に到達し、LV10の暴力的なまでの力を手に入れた）

「・・・お前はなんでいけなかつたんだ？」

（奴は、人間を連れていた。パートナーをな。その最上階に行くまでには3、4回デュエルをしなければならん。しかも1人1人が相当な強さだ。私は自分のテックで行くのだがいつも最後で負けてな。そこの番人に言われるのだ。「貴様には何かが足りん。その答を見つけるまでは俺に勝つことはできないだろ?」・・・・・とな）

「なるほどな。それで足りないものが俺、すなわちパートナーってわけか」

（ああ、その通りだ。一緒に来てくれるか？）

「おもしれえ！いきなり精霊界に行くとはなー爽はどうするよ？」

（……つていねえ！！書置きが・・・「ぼく完全に空氣なんで帰ります。精霊界には行きたくないです」

「アンニヤロー！今度会つたらもっかいヘッドロックだ！」

(まあ落ち着け。まだ続いているや)

「お、ほんとだ。何々?」P-S がんばつていこうよ元マスター  
「お?あいつは来るのか?」……といつても俺はいかねえが  
な!ハハハハハ!」・・・・・・霸霸霸霸霸霸霸・・・

(王よ、何か色々危ない笑いが・・・)

「すまんすまん、取り乱したよ!」だ。で、どうせひつ行く?温泉か  
?」

(いや、我に任せろ。おやうへく時間もあれば扉が開くはずだ)

「ふーん。だつたら一回寮に戻つて準備してくるよ。またこじてこ  
ればいいんだな?」

(ああ、たのむ)

「うー。了解」

・・・しつかし、思い返すと色々カオスだよな。初日からジョン  
ツクス始まるし、俺と同じ世界の奴がトリップしてるし。拳銃の果  
てには精霊界だと。

「デッキは4つも無くなるし。幸いホルス含む『ラスト3』と2軍の  
『サクリファイス』は無事だつたけど。サクリファイスは譲つたけ  
どな。

まあ、これからしばらくはホルス一本で戦うんだろうが。出来れば  
他も使わないでいいけどな。

・・・などと考えていると2時間もあつという間だ。時間が来た  
から待ち合わせの場所に向かう。

「よお、ゲートは開いたか？」

(ああ、ここにある)

まあまた完璧にどこでも○アの再現だな。

「じゃあ、行こうか。俺も真のお前の力を見てみたい。期待して  
るぜ」

(言われるまでもない！私は必ず、マウンテンの人々を救う！)

そのホルスの決意の言葉と同時に、視界が白一色になつた。

「うーじばー？」

見慣れない街、案外にぎわっているようだ。

だが、少し高級そうな店になると店主はいつも《アーマード・ドリームズ》か・・・

確かに今はアーマード中心の政治みたいだな。

結構平和じゃないか？ そう思った瞬間、

「頭が高あい！――！」

耳をつぶざくアーマード」▽5の怒声。

「10様がお通りになる一頭を下げる――！」

なんだ、そういうことか。よく見る典型的な王様政治だな。

「馬鹿、アンタ頭下げる！ 死ぬぞ――！」

「つまつ――？」

そう言って俺の頭を押さえつけたのは《ホルスの黒炎竜》▽6。

「あれ、お前俺のパートナーのホルスか？」

パートナーなら「アンタ」と呼ばないよな。

「そりや回数モンスターなんかいっぱいいるつての。たぶんアンタのパートナーはレベル・タワーあたりにいるんじゃないかなえか？」  
「こそこもひぱりそこでいるぜ」

「せうか、サンキューな！」

そういうレベル・タワーの場所を聞きながら、行へと・・・  
「また立派な塔です事」

高くそびえたつそれはきらびやかな宝石がちりばめられた、なんか  
『バベル・タワー』みたいな塔。  
語呂が似てるからか？

（おお、主か、待っていた）

「こまはーべるなのか。同じじのでもせむほほ性格違つただな

（それせやうだろ。同じ精靈なんぞいない。それより、だ。テッ  
キは我的テッキを使つてくれ）

「当たり前だつてのー。それじゃなきやパワーアップにならなーだろ」

（フツ、畜つまでもなかつたか。ないらば頼むだぞ、我が主よー。この先  
に待ち受けているのは『過去の自分』だー。）

「過去の自分だとー。つてことは俺の無くなつたテッキを使つてくれ  
るのかー。」

（おお、ひへりだり。相当な難敵だぞ）

「やつこつ事は先に言つてくれよなー。【アラ】なんか倒すのー苦労  
だぜ」

(大丈夫だ。主ならば不思議と負ける気がしない。負けるつもりはないのだろう?)

言つてくれるね、」  
「いつは。

「たりめーだ、負けるつもりで『テュエルなんかしたことねーぜ!』・まあ、負けたことはあるけどな」

（その時の悔しさ、未熟さ含めて『過去の自分』だ。そいつらを、打ち破れ!）

「やつてやるよ、そしてお前の新たな力、見せてもらつぜ!」行くぞ  
「……」

そう言つて俺とホルスはレベルタワーの中に入つて行つた。  
その時はまだ、この後に起くる事なんて何も気にしていなかつたんだ  
・・・

第一期4話 こぞれ精霊界！そびえたつ『塔』（後書き）

少し気になつたことが・・・

今回、地の文を少しだけ増やしてみました。

やっぱり地の文は多い方がいいんでしょうか？

それとも会話文を多くしてテンポをよくした方がいいのかな？

どんなどでもいいので、気づいた方は感想に書き込んでくれると  
すくべありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024l/>

---

遊戯王～世界又にかける転生者～

2010年12月12日14時32分発行